

ベスピオ登臨記

松山基範

餘裕の少ない日を繰り合せてイタリヤに行つたのは地震や火山の研究者と知合になつて置きたかつた爲である。それなのにロオマでは祭日や日曜日で三日も無駄に費したから、ベスピオ行きには最早一日だけしか時がなくなつて、その観測所のマラドラ氏に、君のは見物人の參觀であると冷かされた程である。

ロオマからナポリに行つたのは昨年十一月七日である。汽車はロオマを出ると葡萄の多いアルバノ山の裾野を東に廻つてから南の方ナポリに向つた。乗り合せたアメリカの野菜屋の老人は葡萄酒を褒めて妻君と争ひ始めたが、スバラニセ驛を過ぐる頃から遙にベスピオ火山が煙を噴いて居るのが見え始めたので皆其方に氣を取られてしまつた。ナポリに着くとすぐ大學に

行つて見たが、地質の教室には誰も居ないで地球物理の方のシニョレ氏に會つた。此人はナポリの西の方のカンピ・フレグレイ地方の火山性ど地盤の運動どの事を調べて居るので、一しきり其話がはずんだ。日本の地震地や火山の邊での土地の運動の話などをもしたまに、遂にカンピ・フレグレイ地方の踏査をすゝめられて困つた。此處に來たのは實はベスピオ觀測所のマラドラ氏と打合せをする積りであつたのであるが同氏は大學には居ず、又觀測所には電話も通じないのである。日が暮れてから大學を辭して旅館に行つた。

翌朝早くベスピオに行きたいので、其晩すぐに旅館に來つつけの有名な「我等のアントニオ」君を案内に雇ふ約束にした。此旅館は海岸に在つ



第一圖 ナボリから見たスベオ火山

て、部屋之窗をあけると暗の中に向ひの小島に築かれたオボの城の嚴めしい輪廓が見えて芝居の書割を見る様な氣がした。朝の三時頃になると大暴風雨となつたが、關を貫く稻妻と石垣に碎ける大浪とで書割の城が物凄くなつた。氣味悪さは歌劇トスカの終りの幕を

見る様な感じがした。夜が明ける頃には餘程靜かになつて西南には青空も少し見えて來た。

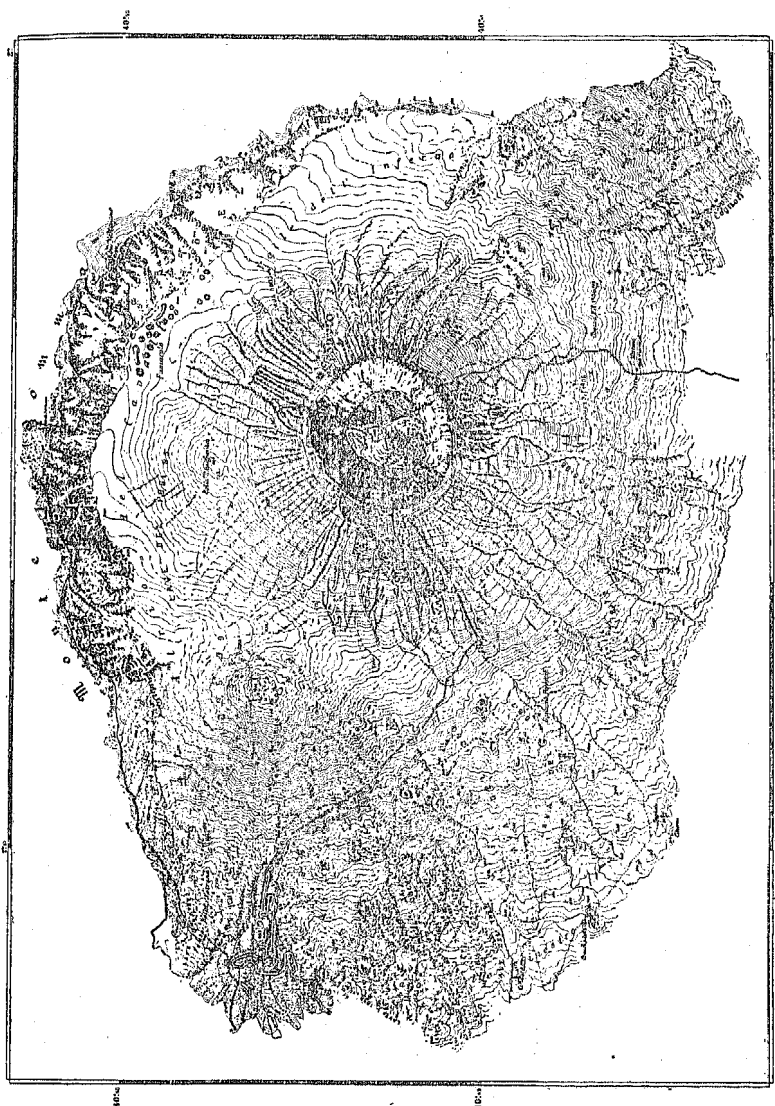
朝食をすまして小雨の中をベスビオ廻り鐵道の停車場に出かけた。同じ宿にとまり合せた平賀、石井兩氏と同道である我等のアントニオ君が天氣は必ず大丈夫であるからと請合ふから、傘も只杖にする積りで携へて行つた東南に聳えたベスビオ山は晴れかけた空の下に輪廓をはつきり現はして、西南のナボリ灣に臨んで居る。山の北側のモンテ・ソンマは此處からでは丁度長い峯を縦に見るから唯頂の光つた山のように見えて北には遠く裾野を引いて居る。ソンマの頂は海面から一三七米の高さに及んで居る。此南にベスビオの圓錐が聳えて居るが、北には谷を隔てソンマに對して居るけれども、南の方は外輪山を覆ふて斜面が遠く麓に達して居る。此頂の左の肩は一一八〇米、右の肩は之より百米だけ低い高さである。煙は餘り盛にもえ立つて居なかつたが、吹き残つた風の爲に吹きなびかされて居る様に見えた。

ベスピオ火山の活動の歴史は西暦紀元七九年の大爆發に始まる。此時まで高く聳えた大きな圓錐の大部は此大爆發の爲めに吹き飛ばされて、今のソンマは其残りである。今も残つて居る昔の裾野から推し測つて、此以前には海面から二千七百米の高さに聳えた雄大な姿の火山であつたと考へられて居る。南の麓のボンベイや西の海岸のヘルクラネウムの町々が深く火山灰に埋められてしまつたのも此時の出來事である。其後此大なる噴火口の中には度々の噴火で熔岩や火山灰などが積つて新らしく圓錐を築き上げて今見るベスピオ火山が出來上つたのである。』

停車場で電車を待つ間に雨は全く止んだ。此電車は山の麓を廻つてボンベイの方に行くのであるから、ベスピオに登る我々はナポリから十軒程のプリアノで山登りの電車に乗り換えねばならなかつた。此處は丁度西の麓になる。初めの程はやはり葡萄畑の中を通つて行つたが、間もなく兩側には橄欖の木が多くなつて百姓屋が

そこ此處に散ばつて居た。橄欖の青い葉の間から古い小さな教會の屋根の見える所などもあつた。時折り熔岩を切割つた中を通つて行つたが道が次第に急になつて來て電車も普通のまゝでは登れない。畑の中に止まつたと思ふと、後には機關車をつけて押し上げる様にした。軌道の方には眞中に齒形の附いたレエルが設けてあつて之からは齒車で喰ひ合せて昇るのである。南側には一八五八年の熔岩、北には一八七二年の熔岩の流れた間を昇つて、ソンマとベスピオの圓錐との別れる所の西の端まで辿り附くと少し平らになつて電車が止まつた。

案内のアントニオ君は車掌と顔なじみであるらしく二人で何角と話して居たが、車が止まると直に私の所に來て、自分が觀測所長を呼びに行くから私は車の中に待つて居る様にと云つた。此處はカンテロニの丘の上で、六百米程の高さである。見れば右にはエレモ旅宿があり、左の小高い所にはベスピオ觀測所が建つて居る。マラドラ氏ならば私から行かねば悪いと思つたが



第二圖 ヴェスヴィオの平面圖

アントニオ君は既に駆け出して、車掌が英語でイタリヤ語を半々に私に待つて居ろとすゝめた。私は觀測所を訪問して次の電車でもと思つたのに、他の乗客の迷惑を構はず

車を停めて所長の来るのを待つて居て呉れるのである。アントニオ君は息を切らして驅けて歸つて、所長はすぐ來ると云つたが、五分程してマラドラ氏はマントを被つて走つて來た。車掌を始め其處に居合せた土地の人は皆丁寧に所長にお辭儀をして、其乗るのを待つて車を出した。

マラドラ氏とは去る九月にスペインで知合になつたのである。早速何日程止まるかと問はれて今日午後はボンベイを見てあすの朝早くバリに歸つて行くのだと答へたら、それはひどいとおぶやかれた。責めて一晝夜は居て山の活動の模様を見てくれ、ばよいのに、それでは科學者の來訪でなく全く見物旅行者のする様だと冷かされても別に答へやうもなかつた。

乗合の一部分はエルモ旅館に行つたと見えて之からは我々の一行の外には別に案内をつれたアメリカ人らしい男女数人だけである。之から電車はウンベルト一世の丘を左に見て、熔岩のごろごろした斜面を右斜に上つて行く。立木も

無くなつたから眼界が非常に廣くなつて、ナポリ灣の向ひのカプリの島なども繪の様に見える。此齒車電車の終點は火口壁の西側で頂上から四百二十米程下にある。此處で今度はケエブルカアに乗り換え、三十度に近い程に急な斜面を眞直に引き上げられて、いよいよ終點に着いた。此處は尙頂上より五十米程低い所であるが、仰げばレエルは尙延びて絶頂に昔の終點の建物半分空に浮いて見えるのが危うげである。一九〇六年の大爆發の時に火口壁が崩れて此建物も絶壁の上に僅かに残つたのである。終點を出るとイタリヤに附物の案内人の群が集まつて來たが、マラドラ氏の姿を見ると皆殊勝にお辭儀をして我々一行には無理勧めをしなかつた。我等のアントニオ君は之に少しづつ心附をやつて居たが、マラドラ氏の指圖で我々に一枚づつマントを借して呉れて、二人程は一所について來た。

之からの道は西南の側の急な斜面を斜に右へ上つて行く。下には止り場もなさそうな斜面が

遠く裾野に續いて、幾回も繰返し噴出した熔岩の流れが手に取る様に見えて、今更ならぬ山の

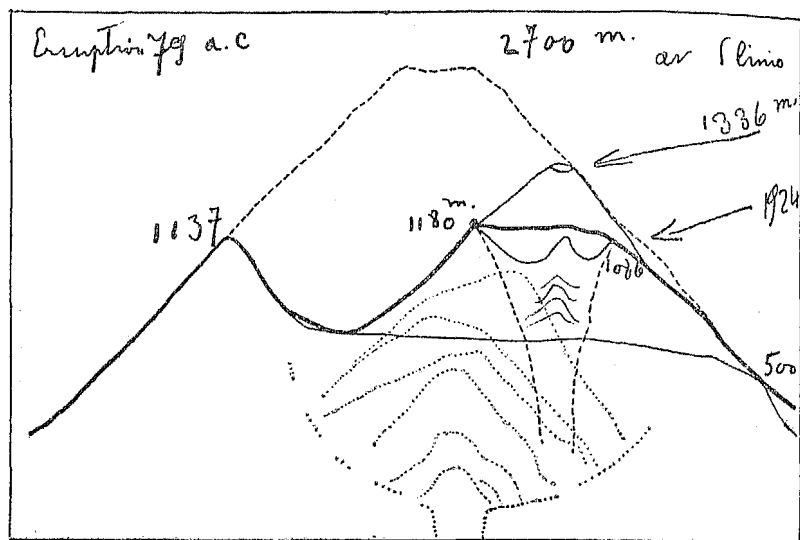


第三圖 火口の中の小圓錐

威力を思はせる。上にはぎくぎくした岩屑の唸しい斜面が今にもすり落ちそうに見えて、思はずも人の足を急がせる。行く事四百米程で火口の南側の椽に出た。海面からは一六五米の高さである。

火口の中は思つたより静かであつた。底は全部熔岩のうねうねした中程に五十米位の圓錐が出来て、其頂きから白煙が立ち登つて居る。時々盛んになつて渦巻く煙が噴き出すけれども、名高いベスピオだからと豫期した程盛んではなかつた。併しマラドラ氏の説明を聞いて見ると今年の六月の大噴火の後九月から静かになつて居るが、此月(十一月)の半過ぎには又活動するだらうといふ事であつた。

ベスピオの火口は殆んど圓形で直径は八百米程である。火口壁の最も高い所は西南で我々の通つた道の上に當る一一八六米の點である。最も低いのは東北の一〇六六米の點である。火口の底は熔岩で充たされて居るが、今では大抵海面から一千米から一千二十米位の高さになつ



第四圖 マドラ氏の描いた説明圖

て居る。此大部分は一九二〇年の秋から冬にかけての大噴火の時に押出した熔岩であるが、方々で今年六月に噴き出した熔岩が其上に被さり、所々には一九一九年の熔岩が其下に現はれて居るのが明らかにわかる。此の中央から少し西南によつた所に五十米位の高さに見える圓錐が出来て居て、其頂から今は靜かに白煙を噴いて居たのである。

火口壁を下りて底に行く事も出来るが、今日は其用意もして來なかつたから止めた。絶壁の上に立つて居るとアントニオ君が來て私の寫眞機で寫眞を撮つて呉れた。マドラ氏は紙を求めてアントニオ君が差出した大きな名刺の裏に鉛筆で圖を書き始めた。私にベスビオ火山の歴史を説明する積りなのである。折柄吹いて來た風に名刺を取り落したのを吹き飛ばされないので手早く拾つたが、ふと名前の下に「日本の紳士達の唯一人の案内者」と書いてあるのを見つけて、私の顔を見てにこつと笑つた。

昔のベスビオが西暦七九年の大噴火で大部分

を失つて、僅かにモンテ・ソンマだけを残した事は初めに述べた。其後に出来たベスビオの圓錐も頂の方は幾度か出来ては崩れ出来ては崩れたが、最近では一九〇六年の噴火が最も著しい出来事であつた。その前には頂上は一三三六米の高さに達して居た。一九〇四年頃から始まつた活動は翌年も續いて絶えず熔岩を出して居た。

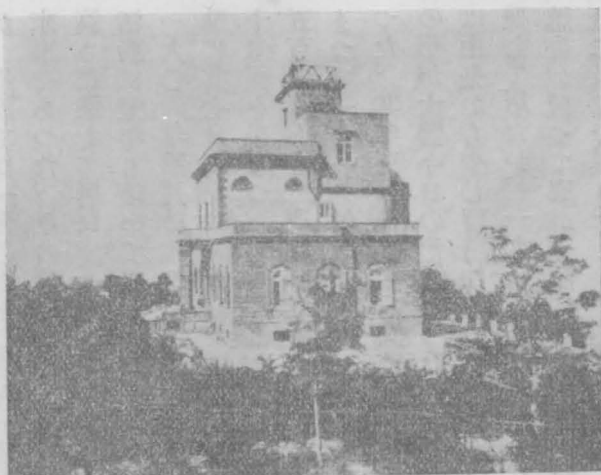
一九〇六年四月に入つては著しく盛んになり、殊に其七日の夜は數回の大爆發が起つて頂上百十米程を失なつた。此時の火口の底は頂上から五百米以上も深くなつたが、押し出す熔岩に高まつて一九一一年には二百五十米程の深さとなつた。其年三月の噴火で又頂上が崩れて火口壁の形が大體今日の形となつた。此の時火口底には中央から少し西南に寄つた所に小い噴火口を残して居たが、一九一三年以來之から押し出す熔岩が積つて底が一面に次第に高まつて來て今日に及んで居る。

こう説明した後でマラドラ氏は心配そうに附け加へた。此様に火口の底が高まると、遠から

ず昔の様な高さになつて、其次には又大噴火が起らねばならぬ順序になると。傍に居たアントニオ君は附いて來た案内人を顧みて心配そうな様子をして見せた。此話に恐れてゐないが時間も少ないから下りかけた。來る時は立寄らなかつたが此道端に小い小屋があつて、マラドラ氏が開いて見せてくれた。火口の研究を始めると夜通しをする事も多いので、時々此小屋に來て休むのである。中には高温度寒暖計や火口から瓦斯を集める裝置なども置いてあつた。緩々を見る暇もなくケエブル・カアの終點に行つて漸く間に合つて、又齒車の電車で十一時にカンテロニの岡の停車場に來た。同行の二氏はアントニオ君に伴はれてエルモ旅館に晝食に行つた。電車は十二時五分に出る筈である。此間に私は觀測所を參觀するから晝食をする時間はなくなつたのである。

觀測所にはマラドラ氏の外には助手と小使どが一人づゝ居るだけである。玄關には直徑一米に近い程のバン皮火山彈が置いてあつた。中に入

ると度々の熔岩の標本を始め、火山毛や火口に出来る鑛物などを採取して陳列して有る。噴火



第六圖 ビスオ観測所

つて居るかと思つて探して見たが見附からなかつた。マラドラ氏は獨身で此觀測所に住み専ら其活動の模様を研究して居る。危険がある

の寫眞は實に見事にえられたから後にナボリに歸つてから何處かに賣

ぐ麓の町村に警報を出す事になつて居るから、麓の人は皆之を徳として安心して暮す事が出来るのである。去る一八五八年と一八七二年の熔岩も幸に此觀測所だけは埋めずに流れたが、遠からず危険が起るかも知れないといふので大切なのは皆ナボリの大學に移して、マラドラ氏は獨り止まつて直接に此火山の活動の模様を研究して居るのである。先には噴火口の中のまだ固まらぬ熔岩の溫度を度々測つて一二〇度までの高溫度を見届けたたり、又火口の中の灼熱された瓦斯の溫度が一二五度にも及ぶ事を確めたりした。近頃は又頻りに火口の底の次第に高まる有様に注意して觀測を續けて居ると話して居た。

こんな話をして居る内に時間はすんすんたつて、もう電車が出ると云つて下から呼びに來たそれでも折角だからと云つてマラドラ氏が小使を呼んで珈琲を出して呉れたのを、立ち飲みをして暇を告げて出た。電車は私を待ち兼ねる様にしてすぐ出た。アントニオ君は私の爲めに紙

の辨當袋にサンドキツチと林檎どを入れて、シ
トロンの一瓶を用意して置いて呉れた。ブリアノ
に降りてボンベイ行きの電車を待つ間に仰いで
ベスピオを見ると、初めに見たよりも高くなつ
かしく見えた。併しボンベイに着く前には電車

濟州火山島雜記

中村新太郎

一、濟州島の大小

濟州島は朝鮮に屬する三千三百餘の島嶼中の
最大なもので、面積百十九方里餘あつて牛島以
下十三の屬島を加へると約百二十方里に達す
る。東西^{十八里二}に長く、南北^{八里十}に短かい楕
圓形の外廓を有し甚だ水平的肢節に乏しい、鶏
卵或は海鼠の形をしてゐると云へる。従つて良
港がなく冬季北西の烈風が吹き荒む時には釜山
と本浦とから來る定期船も着くことが出来ない

が一九〇六年の熔岩の中を通つて其爲めに埋め
られた村の跡を見たり、ボンベイではずつと昔
の七九年の爆發の慘狀を見たりすると、やつぱ
り此山は恐ろしい山であると思つた。

で、正月の祝ひに使ふ品物が七草を過ぎて、や
つと到着して役に立たないで了つたことがあつ
たと聞いた。

二、全島火山の集合より成る

この廣くて二十萬九千九百餘^{大正十二年來調}の人口を
載せて居る朝鮮海峽西部の一大島は殆んど全部
火山岩から出來て居て、地圖で數へ得る圓錐山
の數は約三百三十箇に達する。一つの圓錐山に
飛揚島や松岳の様に數個の火口や爆裂火口のあ